

韓国人日本語学習者の漢字の分け方と覚え方

横山 菜穂子

1. はじめに

本稿の目的は、韓国人日本語学習者は漢字を覚える過程において漢字一字をどのように分け、どのようなストーリーを作って覚えるのか、また、漢字の分け方と覚え方に学習者間で共通した特徴が見られるのかどうかを明らかにすることである。

前回の調査では(横山 2017)、韓国人日本語学習者の漢字の覚え方を具体例を中心に学習ストラテジーの観点から分析し、効果的な漢字指導を探った。調査の結果、漢字一字の字形の覚え方や読み方においてストーリーを用いた例が多く見られ、例えば、字形の場合、「山の下で火を燃やす」というストーリーを作って「炭」の字形を覚える、「皿」と「血」のように紛らわしい字形の場合は「皿が割れて血が出た」、多様な読み方を覚えるのであれば「教室で教わる学生と教える先生」と言ったように個性あるストーリーが多く見られた。ストーリーの作成は字形を覚える、紛らわしい字形を区別する、多様な読みを覚える側面からも効果的であり、また学習者の自発的な学習を促す側面も期待できることから漢字指導に積極的に取り入れたい活動である。また、前回の調査ではストーリーの作成において、個性あるものも多く見られる中で、漢字の一部分をハングルと対比するなど、漢字一字の覚え方に学生間で共通した面も見られた。

どのようなストーリーを作って漢字を覚えるかという問題は、そもそも一字の漢字をどのように分けるかということとも密接に関わってくる。そこで、前回の調査結果を踏まえ、本稿では 20 字の漢字を指定し、それぞれ一字の漢字をいくつに、そしてどのように分けるかを提示してもらい、次にそれらの分け方をもとに、どのようなストーリーを使って漢字を覚えるのかを調査した。本稿では韓国人日本語学習者が一字の漢字を覚える際、その一字をどのように分け、どのようにストーリーを作っていくのかを 33 名の学生への調査から明らかにしたいと思う。

2. 先行研究

韓国におけるストーリーを用いた漢字指導の研究としては崔(2018)がある。複雑な漢字の教授法としてストーリーテリングの活用と可能性を考えるために改訂常用漢字表の中で最も画数の多い「鬱」を対象として、学習者 20 名のストーリーテリングを考察、調査結果の特徴を 4 つ挙げている。まず第一の特徴として学習者それぞれに個性あるストーリーテリングが見られ、自分の状況や認知特性に合うストーリーが見られたという。2 点目は漢字の構成要素の「形」・「音」・「義(意味)」の中で、特に漢字の「形」に着目したストーリーテリングが多く見られたという。3 点目は、ストーリーテリングをすることによって、漢字の「形」への気づきが見られ、漢字の全体的な「形」だけではなく、部分的な特徴への気づきも見られたという。最後に 4 点目として他の学習者とストーリーテリングを共有することによって、漢字への理解が深まる様子が見られたという。以上の結果から、「鬱」のように複雑な漢字を対象としたストーリーテリングは漢字の多様な情報認知と記憶保持だけに限らず、学習者の漢字学習へ気づきを促し、また自律的な漢字学習へと発展できる可能性が示唆されると結んでいる。

「鬱」のストーリーテリングの具体例としては、「憂鬱な人がビールの杯を握って生い茂る森を眺めている時の気分を表したものである」のように漢字「鬱」の一つ一つのパーツに注目したというよりは上の部分は森のイメージ、下の部分はビールジョッキを握っているイメージのように大きく分けたものから、「木がある家に住みたかったのに現実には地下の部屋。顔にはニキビが 4 つ、髪の毛は抜けとても憂鬱だ」のように、「鬱」の 4 つの点の部分をニキビ、右下の部分は髪の毛と言ったように細かくパーツに分け

ている例も見られた。また、「鬱」の漢字に見られる「ヒ」「彡」においては「形」だけでなく「音」として用いられているものもあり、それぞれカタカナの「ヒ」、「ミ」の影響を受けたものと思われる。

以上、崔の研究では画数の多い漢字一字を対象としていたが、本稿では画数が少ないものから多いものまで様々な特徴を持つ 20 字の漢字を対象とし、その特徴を見ていきたい。

3. 調査の概要

3-1. 調査方法

本稿では、学生に漢字の分け方と覚え方に関する課題を提出してもらいその結果を考察した。まず、課題は「提示された 20 字の漢字をそれぞれいくつに、またどのようなパーツに分け、且つそれらの漢字の字体を覚えるためにどのようなストーリーを作って覚えるかを説明する」というものである。対象とした漢字であるが、授業で用いている漢字のテキストの中から学習を終えた漢字 20 字を選んだ。このテキストは小学校の教育漢字 1006 字を 1 年生から順に学習していくテキストであり、調査を実施した時期は、1 年生 (80 字) と 2 年生 (160 字) の漢字学習を終え、3 年生の漢字のうち、約 100 字の学習を終えた段階であった。課題の提出に際し、漢字のパーツ分けにおいてはいくつに、そしてどのように分けたかを明示すること、漢字の覚え方のストーリー作りでは、韓国語で書いてもよいと指示した。漢字の分け方に関しては、あえて分けないという選択も認めた。

20 字の漢字の選定基準であるが、学習を終えた漢字の中から、画数に幅のあるもの、また、漢字の構成が上と下、右と左に分けられるもの等、偏旁冠脚を意識し漢字の構成が一方に偏らないよう選んだ結果、調査の対象とした漢字 20 字は表 1 のようになった。

表 1 調査対象とした 20 字の漢字

赤	火	金	花	音	夜	南	遠	歌	曜
頭	風	国	海	帰	落	筆	橋	勝	菓

3-2. 調査対象

調査対象は筆者の担当科目「日本語基礎漢字」の 2017 年度の受講者 38 名のうち、課題を提出した学生 33 名である。この科目は初中級の学生を対象とした授業であり、学生を専攻別に分けると、日本語日本学科の学生が 29 名と最も多く、神学科 1 名、情報通信工学科 1 名、社会福祉学科 1 名、新聞放送学科 1 名という構成である。

4. 結果及び考察

結果及び考察については、大きく二つに分けて見ていくことにする。まず一つ目は漢字一字をいくつに、そしてどのように分けるかについての結果及び考察、次に漢字のストーリーに見られた結果及び考察である。まず、「漢字一字の分け方」に関しては、20 字の漢字のそれぞれの結果を明らかにすることから始め、各漢字において最も多かった分け方について、結果から見られる特徴を考察していく。その次に分け方に共通性が見られたもの、複数の分け方が存在したもの等、漢字の分類において見られた個別の特徴を見ていくことにする。

次に漢字のストーリーであるが、これも 20 字の漢字、それぞれの結果からどのようなストーリーが見られるかその特徴を見ていくことにする。またストーリーに共通性がある漢字、または共通性があまり見られなかった漢字についても着目したい。先行研究で述べたように、崔の研究では漢字のストーリーテリングでは、漢字の構成要素

のうち「形」、「音」、「義(意味)」のうち、「形」を使ったものが多く見られたということであるが、本稿ではどのような特徴が見られるかも明らかにしたい。

4-1. 漢字一字の分け方に見られた特徴

まず、各漢字の分け方に関し、最も多く見られた分け方を表2に表した。ほとんど差が見られなかったものは二つ表すことにする。

表2 最も多く見られた漢字の分け方

	漢字	いくつに分けるか	分け方	選んだ学生数/全体数(人)
①	赤	2	「土」・その下	26/33
②	火	2	「人」・「ソ」	26/33
③	金	3	「人」・「王」・「ソ」	25/33
④	花	2	「艹」・「化」	17/33
		3	「艹」・「イ」・「ヒ」	16/33
⑤	音	2	「立」・「日」	24/33
⑥	夜	3	「亠」・「イ」・残り	20/33
⑦	南	3	「十」・「冂」・残り	17/33
⑧	遠	3	「辶」・「土」・残り	16/33
⑨	歌	2	左の「可」の部分と右の「欠」	15/33
		3	「可」・「可」・「欠」	13/33
⑩	曜	3	「日」・「ヨヨ」・「隹」	18/33
⑪	頭	2	「豆」・「頁」	22/33
⑫	風	2	「几」・残り(ノ+虫)	22/33
⑬	国	3	「口」・「王」・「、」	20/33
⑭	海	2	「氵」・「每」	18/33
⑮	帰	2	「リ」・残り	12/33
		3	「リ」・「ヨ」・残り	12/33
⑯	落	3	「艹」・「斗」・「各」	22/32 (書き忘れ1名で32)
⑰	筆	2	「竹」・「聿」	27/33
⑱	橋	2	「木」・「喬」	13/33
		3	「木」・「吞」・「冂」	12/33
⑲	勝	3	「月」・「夨」・「力」	20/33
⑳	菓	2	「艹」・「樂」	16/33

上の結果から分かるように、約半数以上（17名以上）の学生が同じ分け方をしたものは20字のうち15例ある一方で、約7割以上（ここでは24人以上）の学生が同じ分け方をしたものは5例（赤・火・金・音・筆）であった。また、最も多い分け方であっても全体数の半分に満たないものも見られ（遠・歌・帰・橋・葉）、これらの漢字は学生間で分け方が大きく二つに分かれたことが影響しているものと思われる（歌・帰・橋）。比較的同じような分け方をした漢字の特徴としては、単純に漢字の構成を左右、上下の2つに分けたもの（海・頭・音・筆など）が多い。また、漢字の一部分から視覚的にカタカナや漢字をイメージする場合は、それらを一つのパーツとして分類したものも多い（「夜」の「イ」、「勝」の「力」、「南」の「十」など）。「花」の場合、「艹」と「イ」と「匕」に分けるか、「艹」と「化」に分けるか考えが大きく分かれたが、いずれにせよ、それぞれ漢字の一部分がカタカナ、または別の漢字に見えたことが後述するストーリーテリングの結果から見ても明らかである。

20字の漢字の分け方では2つ、または3つに分けたものが最も多く4つ以上のものは上位には一つも見られなかったことも特徴と言えよう。また、上の結果からでは分け方に漢字の総画数が大きく影響していないようでもある。漢字の選定時、総画数に関しては差があるものを選んだつもりではあったが、「鬱」のようにそこまで総画数に大きな違いがある漢字を選んではいなかったため、漢字の総画数が分け方に与える影響については大きな特徴は見出せなかった。

次に、表3では漢字の分け方において各漢字に見られた個別の特徴を述べることにする。

表3 各漢字に見られた特徴

	漢字	特徴
①	赤	上下2つに分けたものが多かったが、3つに分けた場合は「土」・「リ」・「ハ」のように分けたものが複数見られた。
②	火	2つに分けたものが多く、漢字の「人」がイメージされやすいことがストーリー作りからも確認できた。
③	金	3つに分けたものが多く、漢字の「王」が「金」という漢字の意味からイメージされやすいことがストーリー作りからも確認できた。
④	花	2つに分けるか3つに分けるか意見が大きく分かれた。2つに分けた学生の場合、「化」という漢字をイメージした例が複数見られ、3つに分けた学生の場合、「イ」を「人」と見る例が多かった。
⑤	音	2つに分けたものが多かったが、これは「立」も「日」もすでに授業で学習を終えた漢字であった影響が大きい。その一方で「音」だけに見られた特徴として6名の学生が「分けない」を選んでいたことが挙げられる。理由として「音」の韓国語の読み方はハングルで「음[wm]」と表すが、「音」と「음」の形が似ていることから分けない（分ける必要はない）という意見が見られた。
⑥	夜	3つの分類の次に多かったのは4つであった。4つに分けた8名の学生の場合、全員「十」・「イ」、そして残りの部分を「久」と「`」に分類するパターンであった。
⑦	南	2つに分けた場合の分け方に違いが見られた。一つは「十」とその残りの部分、もう一つの分け方は「十と口で一つのパーツ」、そしてその残りの部分という分け方である。
⑧	遠	しんにょうをさらに分けたものは見られなかった。また、4つに分けた場合は、「土」の下の部分を「'」と残りの部分に分けるものと、「口」

		と残りの部分に分けるものが見られた。
⑨	歌	可を2つで1つのパーツと見るか、可を一つ一つに分けるかで大きく意見が分かれた。
⑩	曜	ヨの部分の2つに分けたものはほとんど見られなかった一方で、12名が「日」・「ヨヨ」・「隹」を「イ」とその残りの部分の4つに分けていた点が特徴的であった。
⑪	頭	豆をさらに分ける例はほとんど見られなかったが、「頁」を「八」とその上の部分に分けた例は複数見られた。
⑫	風	「几」・残り(ノ+虫)の2つに分けなかった学生はほぼ全員、「几」・「ノ」・「虫」の3つに分けていた。
⑬	国	「口」・「玉」・「、」の3つに分けなかった学生は全員、「口」・「玉」の2つに分けていた。
⑭	海	「斗」・「毎」の2つの分け方の次に多かったのは、「斗」・「毎」をさらに上下に分け、全体を3つに分けたものであった。
⑮	帰	2つと3つに分けたものが同数であったが、「リ」・「ヨ」「冫」・「巾」と分けたものも7例見られた。
⑯	落	3つに分けたものが多く見られたが、「各」をさらに「夂」と「口」に分け、全体で4つに分けたものも8例見られた。
⑰	筆	20字の漢字の中で最も同じ分け方をした学生が多かったが、「聿」をこれ以上分けなかった理由は、漢字の形から意味が想像しやすいことが影響していることがストーリー作りから確認できた。
⑱	橋	2つと3つに分けたものが多かったが、「橋」の右の部分を「夭」・「口」・「冂」と分け全体で4つに分けた例も8例見られた。
⑲	勝	3つの分け方の次に多かったのは、「月」・「火」・「二」・「力」の4つに分けるパターンと左右で2つに分けるパターンであった。「𠂔」を「火」と「二」に分けた学生が複数見られたが、これもやはり漢字のそれぞれのパーツから別の漢字がイメージされたパターンであると言える。
⑳	薬	2つに分けた学生の大半は「藥」の漢字を知っており、その意味をストーリー作りに取り入れているパターンが多く、3つに分けた学生の大半は「艹」と「樂」を上下に分けたものであった。

表2では共通した分け方のうち最も多かったものには、2つまたは3つに分けるものしか見られなかったが、表3の各漢字の特徴では4つに分けたものも複数見られた。例えば、「落」では「各」をさらに「夂」と「口」に、「橋」も「呑」を「夭」・「口」のように分け、細かく分けたものには「口」を一つのパーツとして分ける例が複数見られた。その一方、「口」があればすべて一つのパーツとして捉えるわけでもなく、例えば「遠」の「口」の部分の一つのパーツとして分けた例は見られず、また、「橋」の場合も、「呑」を「夭」・「口」と分けた例は複数存在しても、「冂」の部分「冂」と「口」に分けた例は見られなかった。これはどのような漢字のストーリーを作るかによって、漢字の分け方が変わってくることと関連している。また、細かく分けすぎることによって漢字を覚える時にストーリーが複雑になる可能性もある。2つから3つの分け方が多かったのは、2つから3つの分類が、今回指定した20字の漢字を覚えるストーリー作りに適当だったと考察できる。もう一点、漢字を「分けない」とする意見が少数ではあるが特定の漢字（「音」6名・「火」4名）に見られたことも特徴である。「音」の場合は上述したように漢字の全体の形とハングルの形が似ていることが影響しているように思われ、「火」の場合は画数が少なく、よく知っている漢字であることから、あえて分けて覚える必要がないことが理由ではない

だろうか。このように、今回の調査ではすでに学習した漢字を対象としたが、もう覚えてしまった漢字を、再びどのように分け、覚えるかと尋ねることは少し順番が逆のようにも感じた。崔の研究ではあえて画数が多い「鬱」を調査対象としていた。大半の学生にとって普段書くことがない漢字であり、見慣れない漢字であることから様々なストーリーが期待できると考えたことが選定の理由であろうと思われる。このように調査対象の漢字は学習済みの漢字であるか、未習の漢字であるかも調査結果に影響を与えるように思われた。

4-2. 漢字一字の覚え方に見られた特徴

以上、漢字の分け方に見られた特徴を述べたが、それらの特徴は漢字を覚えるストーリー作りにどのように反映されているのだろうか。漢字のストーリー作りであるが、実に多様なストーリーが見られた。漢字の分け方とは違い、結果を数字では表しにくいので、表4ではストーリーに類似性が見られたものを中心にまとめ、書き切れないストーリーに関してはキーワード等を紹介することにする。

表4 漢字一字の覚え方に見られた特徴

	漢字	ストーリー（覚え方）	キーワード・イメージ
①	赤	土の下に根を伸ばす。 土の下に赤い火。 土（の上）を歩く人。	土・火・根・熱い・人・八・足・血・ 火事・
②	火	人が両腕に火（松明）を持っている。	人・火（松明）・腕・怒った人・たき ぎ・石・
③	金	屋根の下の王が両脇（両手）に金を持 っている。 王の両手にはお金がある。	屋根・鉄・王・玉・家・金・宝石・ お金・城・ばんざい・
④	花	草が化けて花になる。 芝生（草）の上で人がヒヒヒと笑っ ている。	人・草・根・ヒヒヒ（笑い声）・化け る・座っている人
⑤	音	日が昇ると自然のいろいろな音が 聞こえる。 日の上に立つ（立って日を見る）。	日が昇る・立つ・口・音
⑥	夜	屋根の下に人がいて窓に明かりが 一つともっている。 夕方になると人は家に帰る（いる）。	屋根・人・夕方・凧・帽子・窓・星 まくら・明かり・
⑦	南	羅針盤の針が指しているのは南。 囲いの中に十頭の羊がいる。 十字架が見える教会にいる羊。	羅針盤・針・村・囲う・羊・10円・ 日本円のマーク（¥）・ポケット・墓・ かかし・教会・十字架・
⑧	遠	馬（船）に乗った人が遠くへ行く。 荷物を頭にのせた人が遠くの道へ 売りに行く。	波・馬・帽子・将軍・遠く・道・船・ 人
⑨	歌	口を大きく開けて歌を歌う。	歌う・あくび・可能・人・カラオケ・ 「可」はテレビのイメージ・欠ける・
⑩	曜	「ヒヨヨ」と鳴くとり。 日がさす中を羽を広げて鳥が飛ぶ。	日が昇る・人・日差しがさす・日曜 日・「ヨ」からハングルの「E」 (토요일=土曜日)をイメージ・羽
⑪	頭	豆のように小さい頭。	豆・顔・八・百・豆の形から人の頭

		人の頭にいいものは豆と貝。	と首をイメージ・貝・「頁」はブドウのイメージ・
⑫	風	風が吹いて虫が飛んでいった。 風に吹かれながら風が飛んでいる。	風・虫・飛ぶ・凧・船・かさ・机
⑬	国	ある国の王が国民を守って国となる。	地図・王・国・「、」は「国民・旗・目印・ほくろ・へそ」のイメージ
⑭	海	毎日いる海。 毎日（いつも）水であふれた海。 水の母は海。	水・母・家
⑮	帰	杖をついて家に帰る人。 道を歩く疲れた人。	壁・鳥・「リ」はつえ・髪イメージ・人・自転車・かかし
⑯	落	名前も知らない草が水に落ちる。 花・草おのおのからしずくが落ちる。	名前（字形が各と似ていることから）・草・落ちる・しずく・水
⑰	筆	竹で作った筆。	竹・筆・「聿」から「書く」をイメージ・ほうき
⑱	橋	木で作った橋。 背負子（しょいこ）を担いで木の橋を渡る。 木を使い、天に向かって作った橋。	木・間・背負子（荷物を担ぐための木製の器具）・呑む
⑲	勝	月を使って力を合わせ、戦い、勝つ。 月の下で二人の人がどちらが勝つか力比べをしている。	月が沈む・力・勝つ・光・月・戦い・笑う・薪・怒る
⑳	薬	薬草で作った薬。 草の下に楽しみで薬（「草が楽しい」で薬）。 草と木が楽しくさせる。 キラキラした白い果実と草で薬。	木・白い・草・楽しい・「白い」の左右にある4つの「、」は「キラキラ」したイメージ

表4から分かるように、実に多様なキーワードを用いて各自個性あるストーリーを作ったことが分かる。漢字一字の分類にはある程度の共通性が見られた一方で、ストーリーの場合は漢字の分け方は同じであっても、やはりストーリーには違いがあるものの方が多かった。例えば「金」の場合、「屋根の下の王は金をたくさん持っている」と言ったように、全体に似ているストーリーもあるにはあったが、それ以外の漢字の場合、実に様々なストーリーが存在し、漢字の分け方のように共通性が見られたとは言にくい結果となった。これらの結果から見える特徴を6点に分けて述べたいと思う。まず1点目は、漢字の構成要素「形」・「音」・「義（意味）」がストーリーにどのように反映されているかであるが、崔の調査結果では、漢字のそれぞれのパーツを「形」として用いたものが「音」・「義（意味）」より多いという結果であった。本調査でも「形」として用いるものが多い一方で、「義（意味）」として用いられたものも少なくなかった。例えば「赤」であれば「土の下に根」、「勝」であれば「力くらべをして勝つ」など、「土」や「力」を意味として用いていることが分かる。これは崔が複雑な漢字を調査対象としたのに対し、本調査では対象とする漢字がそこまで複雑ではないものも多いこと、一字の漢字を構成する部分にすでに既習の漢字が含まれている（「赤」における「土」・「勝」における「力」・「音」における「立」と「日」など）ものが少なくなかった点が影響しているものと思われる。2点目は、本調査でも崔の結果と同じく漢字の一部分を「音」として用いた例はそこまで多くなかった。例えば「夜」の「イ」

をカタカナの「イ」と捉え「イ」と読む例はほとんど見られず「人」をイメージしたものが多かった。同じように「花」の「ヒ」の部分「ヒヒヒ」と笑い声にしてストーリーに取り入れた例は1例で、その他は「イ+ヒ=化」として「義（意味）」と捉えるか、「（足を組んで）座っている人」のように「形」としてイメージするパターンが多かった。3点目は、部首の中にはその使われ方がほぼ同じものもあれば、多様な解釈をするものも見られたことである。例えば、「さんずい」は「水」、「草冠」は「草」、「木編」は「木」の意味として用いられるものが殆どであったが、「しんによう」は、「船・馬・道・波・人」のように様々な「形」に捉えられていた。部首は漢字の意味を表すだけに「義（意味）」として用いられるものが多いと予想したが、「形」としても様々なイメージされることが明らかになった。4点目は、「音」や「葉」のように漢字のそれぞれの構成要素に既習の漢字がある場合には、ストーリーを作るというよりは「立って日を見る」、「草が楽しい」のようにそれぞれの漢字の読みを単純に足したものも少なくなかったという点である。その一方、「橋」や「帰」などは漢字の分け方にもいくつかのパターンが見られ、ストーリーにも様々な特徴が見られた。このことから漢字のストーリー作りはある程度複雑な漢字を覚える時にこそ、より効果的に学習者自らが記憶に留められるストーリーを自主的に作れるのではないかと思われた。5点目は、作ったストーリーのまま漢字を書くと字形を間違えてしまう恐れがあるものも存在したことである。韓国の漢字では「海」の右の部分は「母」と書くこともあり「水の母は海」とすると「母」を書いてしまう恐れ、また「南」の場合も「囲いの中に羊」とすると「羊」を書いてしまう恐れがある。自主的な漢字学習としてストーリー作りは効果があるが、指導する側の細かなチェックも忘れてはいけないと思われた。最後に6点目であるが、ストーリーに韓国らしさがいくつか見られたという点である。「橋」の「吞」の部分韓国に昔からある、荷物を背中に担ぐ道具とイメージした学生が複数見られたり、字形の一部をハングルとしてイメージしたものも見られた。

5. おわりに

韓国人日本語学習者は漢字を覚える過程において漢字一字をどのように分け、どのようなストーリーを作って覚えるのかを33名の学生を対象に20字の漢字から調査した。その結果、一字を2つから3つに分類したものが多く見られ、分け方には共通したものも見られた一方で、同じ分け方をして漢字を覚えるストーリー作りには各自それぞれのストーリーが見られ、共通したストーリーは多いとは言えなかった。「形」・「音」・「義（意味）」のうち、漢字の「形」と「義（意味）」を用いたストーリーが多く、「音」を利用したストーリーは少ないという結果だったが、これは選んだ漢字による影響も大きいと思われた。よって漢字を選定する際には、単純に分類できない、もう少し複雑な漢字を対象としたら、本調査とは異なる結果が出るようにも思われた。漢字のストーリー作りは漢字学習において自主的な活動を促す側面が期待できるが、本調査でも学生自らが漢字の構成要素を辞書で積極的に調べたと思われるようなストーリーが複数見られた。今後も、指導する側の細かなチェックも必要不可欠であるが、漢字の自主的な学習方法としてストーリー作りを取り入れていきたい。

<参考文献>

- 崔廷珉 (2018) 「複雑な漢字を対象にする日本語教授法—「鬱」を対象としたストーリーテリングから—」『日本語教育研究』45:181-196、韓国日語教育学会
- 横山菜穂子 (2017) 「韓国人日本語学習者の漢字学習ストラテジー—具体例から効果的な学習指導を探る—」『日本語教育論集』26:50-57、姫路獨協大学大学院
- (よこやま なほこ 聖公会大学)
yokoyama@skhu.ac.kr